

## 思春期の子育てで向き合う

### 「互いに尊重しあう関係」

#### デートDVの実態と予防

期日 令和元年11月21日（木）  
講師 山中多民子さん

（DV・虐待予防研究会代表／公認心理師）

## DVってなに？

DVとは「配偶者や恋人など親密な関係にある、又はあった者から振るわれる暴力」のこと。このうちデートDVは相手と実際に相手であることを指す。

一般的なDVは、結婚したり内縁関係があるので、子どもがいたり生計を共にしているなどの難しい問題もあるが、デートDV（交際相手）の場合は、そのようなことが無いなど多少の違いがある。

では、DVはどのくらい起きているのだろうか。平成30年の警察庁による配偶者からの暴力事案の認知状況は77,000件以上である。被害者の約8割は女性であり、割合としては圧倒的に多い。一方で被害者の2割は男性である。かつては9割以上の被害者が女性であったが、年々男性の被害の割合

が増えている。デートDVに関しても、男の子が被害にあっているケースも無くはない。DV被害は、年齢的には30代が約3割と最も多い。結婚し、子育て中である年代といえる。

DVについて、世間一般では「DVは身内の痴話ゲンカみたいなもの」「本当に別れようと思えば別れられるはず」「暴力は、コミュニケーションが下手な人がストレスをためたときに起こすもの」「気をつけていけば無くなるのではないか」などと言われる。しかしこれらは誤りである。

DVは「パワーとコントロール」といわれ、暴力で相手を支配するということである。ただのケンカならば対等な関係性の中で勝ったり負けたりがあるが、DVでは力を持っている方とそうでない方、優先される方とそうでない方の力関係ができてしまい、対等な関係ではなくなる。

## 「暴力」と

### 被害者・加害者の

#### の関係

DVというと、殴る蹴るといった身体的暴力が最初のイメージとして挙げられるだろう。

しかしそれだけではない。精神的暴力も多く、また、性的暴力も起きている。殴られていないからDVではない、ということでは決して無い。

精神的暴力の特徴として、巻き込まれていくときの分かりづらさがある。思いやりのある人ほど、自分の中に悪いところがあったのではないかと思ってしまう。精神的暴力は体への暴力に移行する。なので、精神的な暴力があった時点で、なるべく早く気づいて介入したり、考えたりしなければならぬ。

DVは「パワーとコントロール」といわれ、暴力で相手を支配するということである。ただのケンカならば対等な関係性の中で勝ったり負けたりがあるが、DVでは力を持っている方とそうでない方、優先される方とそうでない方の力関係ができてしまい、対等な関係ではなくなる。

DVは、もともと持っていた力やその人らしさを奪ってしまふ。DVは弱いから被害を受けるのではなく、暴力を受けることで力を奪われているのである。



## 暴力の責任

DVの話になると「相手にだって非があるんじゃないの？」という話題が出る。

DV加害者は暴力の責任について、自分も悪かったけど相手も一定割合でその責任があるというような、相手次第で自分の責任がかわるといふ考えを持つ。

しかし、相手にも悪いところがあるからといって、その行動（暴力）を選択したのは自分である。「つい、かっとなって手を出してしまった」などと言うが、本当にそうであれば、もつと他の場面でも暴力をふるうはずである。

被害者に責任があるのではなく、暴力を選んで使っている

のは加害者であり、暴力の責任は加害者本人にある。

## 「デートDV」の

### 実際

暴力被害、加害の経験について、千葉県で約1,000人の大学生を対象にした調査（平成23年3月） ちば県民共生センター）では、交際相手からの暴力について、被害・加害の双方で4～5人に1人の割合で経験があるとの回答であった。友達の中で1～2人被害者や加害者がいる状態である。

被害を受けたときの行動としては、相手と別れたのは50%であった（平成28年度内閣府男女共同参画局の調査）。別れなかった理由としては、「相手が変わってくれるかもしれないと思ったから」が約半数であった。また、「別れるとさみしいと思った」も多くあげられた。交際相手以外との関係が薄いことが影響している。

DV被害の実際の事例では、  
・異性の生徒や先生と話すときにごく怒鳴ってくる  
・「お前の言い方が悪い。話す気無くなる」などと話し合いにならない

・束縛や命令がひどくなり身体的な暴力に発展、深夜まで続く説教

・性的な行為を抵抗してもやめてくれなかったり、その後エスカレートしている

また、男子の被害事例は少ないが実際にはあまり表面的にはならないが一定数はあるのではないかと考えている。

加害者自身もすごく混乱している様子が見て取れる。頭では良くないと思っけていてもなかなか気持ちがついていかないうようだ。

## 親として

### どう関わるか

もし自分の子どもが被害を受けていたら、どうしたらよいだろうか。

まずは、しっかりと最後まで話を聞くということが大事である。何があったのかという出来事と、どう感じているのかという気持ちをしつかりと聞いてほしい。気持ちには、自責感、相手への怒り、混乱などがある。いろいろな矛盾した話もあると思うが、最後まで聞くことが子どもの安心感につながる。

本人が何に困っている

るかも確認したい。DVを受けているという根本よりも、学校に行きにくい・バイトができないなど、目先のことで困っていることが多い。これをしっかりと聞かないと、親と子どもがずれてしまう。被害者が別れたと思っけていても、加害者は納得しないことが多い。加害者の納得を待っけていても別れられないので、納得は必ずし

も必要ではないと思う。被害者の中には「きちんと終わらせなければ」と思う人もいるが、一緒にはやっていけないという意思を伝え、それで終わりにしても良いのではないか。危険な場合は親などの第三者が出る必要もあり、また、それにより加害者の態度が変わることもある。本人がどうしても入っけてほしくないということであれば、表立っけて出るのではなく、必ず後でサポートし、二人きりになるような場所ではなく、レストランのような人目のあるところで近くで見守るということが必要である。

加害者の親としての関わりも基本的には同じで、出来事と感情を聞くということである。そして、暴力を絶対に肯定しない、矮小化しないということが最も大切となる。

暴力は否定するが、人格否定はしてはいけない。行動と人格をわけて話をすることは意識しないとできないものである。そして、暴力ではない他の方法やアプローチをいっしょに考え、試してみる必要がある。

親は、何かを決めるのではない

くて、本人が意思決定をするためのサポーターとしての役割である。そのためには、DVの関係性について話したり、状況の整理を手伝ったり、ネガティブな感情の表し方のモデルを示すなどの方法がある。また、家族の中だけに抱え込まず、専門的な支援機関や学校につなぐことも親の大切な役割である。

## DVの関係に

### ならないために

DVの関係にならないためには、それぞれの違いを認めて尊重しあうことができるかが重要になってくる。どちらが正しいだろうか。どちらが正しい／間違っているという選択になっってしまうと、如何に自分が正しいかを言えた方が勝ちになるようなパワーゲームになっってしまう。そうではなくて、二人にとっけて適度なところを見つっけていければ良いのである。

また、暴力行為への意識を高めることも重要である。腹が立ったら殴っけてよいと考える人はいないが、例えばしつけや相手をわからせるためならば良いなど、暴力に対してハードル

が低い場合が多い。ハードルが低いと加害だけではなく、被害の側も暴力を受け入れやすくなる。どんな理由があっても、暴力は否定するということは一貫しておくことが必要となる。

自分の感情に気付き、攻撃的でない形で伝えるという点もある。気持ちは自然に沸き上がっけてくるものなので、ネガティブなものも含めて多様な気持ちがあるのだが、そこに伴う行動は自分で選べる。「むかつく」の感情により「怒鳴る」という行動をとる人もいるが、同じ感情でも「怒鳴らない」人もいる。つまり、感情と行動は別なのである。子どもに対しても「今、むかついたんだね。でも怒鳴るのは良くない」というように、感情と行動を分けて伝えることができるという良い。

そして、孤立しやすい状況になるので、交際相手以外の第三者とのつながりをしっかりと持つことである。「最近どう？」と言えるぐらいの関係でつながっけておくことよ。